

巻頭言

生物機能開発研究所は、大学から直接に予算を与えられる応用生物学部・応用生物学研究科とは独立した存在として、学部・研究科の研究力を強化し研究におけるプレゼンスを高める研究活動の牽引役として役割を担ってきました。しかし 2021 年度からは予算は大学から直接に付与されるものの大学院附置研究所として応用生物学研究科の一部となりました。将来的には予算も学部・研究科の予算に組み込むことが考えられています。従来から学部・研究科のために活動してきたので、組織的には学部・研究科の事情や要望に対応しやすくなったと考えられますが、存在意義を活かせなければ研究所の存続を危うくする状況も懸念されます。

2021 年度は外部資金獲得につながる研究アクティビティを育成するため「葉巻病ウイルス非感染甲州ブドウ樹を用いた上質のワイン作製の基盤的研究」（代表者：小島晶子准教授）、「サボテンのストレス耐性機構解明，有用成分解析および栽培技術の開発研究」（代表者：前島正義教授）、「ステルス性を有する抗体結合酸化鉄ナノ粒子の調製」（代表者：堤内要教授）の 3 プロジェクトを支援しました。採択にあたっては研究内容や研究組織に加えて外部資金獲得への姿勢を重視し、年度末の報告で研究の進展と外部資金獲得への取り組みを確認しました。また、博士前期課程の学生 6 名を選抜して研究補佐員に採用して研究生活を支援する一方で、選抜方法を改めて博士前期課程 1 年目の中間報告会に合わせて次年度の研究補佐員の募集と選抜を行うことにしました。これにより、中間報告会に向けて準備した資料を応募に活かすことができるとともに博士前期課程 1 年目の研究への取り組みにもとづく適切な選抜ができるようになりました。

国立大学ではプロジェクトベースでのみ研究所が存続される体制となり、多くの研究所が姿を消しました。本学でも研究所の存在意義や目的・目標を明確化し、意義や目的・目標に合致した運用が求められるようになりつつあります。プロジェクトの採択における外部資金獲得への取り組みの重視や研究補佐員の募集・選抜方法の変更は、このような動きに沿ったものです。一方、研究所の存続には高い研究アクティビティや研究におけるプレゼンスの高さも欠かせません。研究を牽引してくれる大学院生の研究環境の整備と向上，研究の幅や質を高める講演会の開催や研究情報の提供，研究連携の機会創出などにも注力する必要があります。

生物機能開発研究所

所長 福田雅夫